

キャサリン・マンスフィールドの

「家ちがい」について

——「編物」を中心に——

市 橋 弘 道

「家ちがい」(“The Wrong House”)は、キャサリン・マ

ンスフィールド(Katherine Mansfield, 1888-1923)が一九二

〇年一月十六日に、‘A Strange Mistake’^①として書き始

め、後に改題した作品である。原文で四頁弱のこの小品は、

間違つてやって来た葬儀の行列によって、四方が暗闇の洞

穴、すなわち墓穴に落ち込んだかのように感じた主人公ビ

ーン夫人(Mrs. Bean)が、いずれ訪れる自己の死を知り、

狼狽し、死を強烈に恐れ、何とか避けようとしている姿を

描いたものである。しかしながらこの作品は、このような

気分や感情だけではなく、編物を巧みに用いることによつ

て作者自身の死に対する態度を暗示している。拙論はこの

編物の持つ意味を考察しようとするものである。

死の恐怖、他人ではなくこの自分が死ぬという恐怖は、

ビーン夫人ならずとも多くの人たちが覚えるところであろ

う。マンスフィールドも例外ではなかったのである。病氣

と孤独感とが彼女を死の恐怖へと落とし入れたのである。先

ず彼女の病歴^③を見てみよう。彼女は一生を病氣との戦いで

過したと言つてもよい。一九一一年七月肋膜炎に罹る。一

四年再発。十五年二月関節炎に苦しむ。一七年重いリュウ

マチ。同年十一月肋膜炎で倒れる。一八年二月初の咯血。

同年秋から冬にかけて健康が著しく衰える。一九年夏の終

りからまた身体不調。その後しばらく健康を回復したが、しかし二三年一月十日激しい咯血のうちに永眠。病氣に加えて、療養のためにイタリア、スイス、フランスとヨーロッパ各地に転地したことによって、夫マリ(John Middleton Murry)との別居生活を余儀なくされ、その結果、極度の孤独感を抱かなければならなかった。彼女は自分が味わったこの孤独感を「地獄のような」^④と感じて、マリにこう書き送っている。「あなたにはおわかりにならないでしょう。わかる筈もありますまい。あなたが再び帰ってしまったれ、私がまた寝こんだ時のあの孤独がどのようであったかは。」^⑤と。病身のうえに独り住いが加わった彼女の状態は想像に難くない。こういう極度の不安な状態にある時、彼女は死の恐怖に襲われたのである。その時の体験を彼女は日記に克明に記録している。

「(一九一九年)十二月十五日。……眠りに就いた。と、突然全身が砕けていくのを感じた。全身が激しい衝撃——地震——で砕けた。まるでガラスのように砕けた。長く続く恐ろしい震え、……脊髄も骨もあらゆるところが揺れる。耳には低い雑音が鳴る、そして、まるで砕けたガラスのような、揺れ漂う緑色の輝きを感じた。目覚めた時、激しい地震があったのだと思った。しか

し全てが静寂。次第にわかってきた。そして、その夢の中で私は死んだのだと、確信した。これからも生き続けるだろう、数ヶ月或いは数週間、数日或いは数時間。時間ではない。あの夢で私は死んだのだ。……」^⑥
この後一ヶ月ほど経た一九二〇年一月十六日、マンズフィールドは「家ちがい」を書き始めたのである。この作品にはマンズフィールドの死生観が含まれているに違いない。「家ちがい」はビン夫人が食堂の窓辺で編物をしているところから始まっている。

「裏編二、表編二、かけ目一、二目一緒。」古い歌のように、あまり何度も歌ったのでただ息をすればもう歌ってしまう歌のように、彼女はこの編目の数を低い声で言った。^⑦

これに続く二つのパラグラフで、この編物が教会へ慈善のために贈られるものであって、しかも、贈るたびに大いに喜こんで受け取られていること、さらに、編物の最中に溜息をつく、他の時にも始終つくその溜息は彼女の癖であって、その時に特別に何かを考えているのではないこと、この二点が語られる。編目の数を表わす言葉は、*Two purll—two plain—woolnfrontotheneedle—and knit two together* であるが、ここに繰り返されている「音の響き

が、冒頭三節のトーンとなり、ビーン夫人が軽やかに無心に編物をしている情景を引き立てている。ところが、これに続く二つのパラグラフで作者はビーン夫人の心の中を見せられる。

「……冷たい秋の午後であった。風が瘦犬のように街路を走り廻った。向い側の家並は、まるで醜い鋼のはさみで切り抜かれて、灰色の紙でできた空にはりつけられたようであった。人一人見られなかった。

「二目一緒。」時計が三時を打った。まだ三時なのかしら、もう薄暮のようだ。薄闇が部屋へ漂い来、重い粉のような薄闇が家具にとまり、鏡に薄膜を張った。

……。」

「瘦せた犬のような風」とか「切り抜かれた家並」といった表現や「膜を張るような薄闇」という鋭い観察がみられるこの箇所は、ビーン夫人の目に映じた風景であって、彼女の孤独さを伝えている。彼女の孤独は、まだ三時だのにもう薄暮のようだとか彼女が感じる暗さとなって作品全体に漂うのである。そして、この暗さが次に何か好ましくない事が起ることを予告する。すなわち葬儀の行列がやって来たのである。葬儀の馬車行列も、窓辺でガラス越しに眺めているビーン夫人にとっては、他人事であった。どの家が

ブラインドをおろしているのだろう。その家が葬式を出す家なのだが、と向いの家並を眺めるだけの余裕があった。ところがその行列が彼女の家へとやって来たのである。

「ちがいます、」彼女はうめくような声で言った、そして、よろめきながら、何やかやにつかまりながら、もう一度発作が来る前に、どうにか玄関にたどりついた。彼女は戸を開けた、顎はふるえ、齒はガチガチと鳴る、やつのことで彼女は声を出して言った、「家ちがいです。」

行列は帰って行った。彼女は玄関の戸にもたれながらたずんでいる。

「しかし彼女は何も考えていなかった。今起った事についてさえも考えなかった。四方が暗闇の洞穴へ落ちこんだかのようにであった。」

玄関の戸を開けて直接葬儀の行列と接しなければならなかった彼女は、間違いをなじるとか、どうして間違っただけろうと考えるとかさえしないで、ただ茫然としているだけである。何も考えなかったということが、彼女の動転の深さを端的に表わしている。彼女は自分の死を恐れたのである。このあとの彼女の行動はこの恐怖の熾烈さを物語っている。お手伝いが裏口から帰って来た時、ビーン夫人は自

分が玄関にいるのを知られてはならないと食堂へ引き返す。そして、まだ四時なのにといぶかるお手伝いにかまわず、ランプを持って来させる。夫人が編物を踏みつけているのに気づき拾い上げたお手伝いは、夫人が眠っていてまだ目覚めていないのだ、と思う。「実際老夫人の目は、うわ葉がかかったようにどんよりとし、ぼうつとしているようであった。^⑭」編物を受け取った夫人は、編棒を引き抜き、ほどこき始めるのである。このあとお手伝いがブラインドをよろして台所へ消えて行くところで「家ちがい」は終わっているのである。ビン夫人の死の恐怖の深さ強さは、ランプを持ってこさせたことや、眠っているかのような表情などからも想像できるが、特に編物をほどこいたところに最もよく表われている。その上、ブラインドをお手伝いがおろすことによって、ビン夫人のいずれ訪れる死が予告されることになる。このように、「家ちがい」はビン夫人の気分や感情を、老人の孤独感^⑮や死を鋭く見つめながら描いているのであるが、この孤独と死に深く関連して「編物」が用いられていることを見逃すわけにはいかない。編物は作品におけるビン夫人の實在感を高めるための小道具とも考えられる。また、作品の初めと終りを、平静さと苛立ち、無心と不安というふうに対照させる役目をも持っている。

さらに、編物をほどこくということで、ビン夫人の恐怖の強さを表わしている。しかしながら、たとえマンズフィールドがこのような意図で編物を用いているとしても、完成した作品のなかでは編物はそれ以上の意味を持っているようである。

ところで、マンズフィールドは「家ちがい」においてだけでなく「入江にて」(At the Beach)^⑯においても編物を使っている。「入江にて」は、彼女が比較的健康を回復し、しかも夫マリと共に初めて落ち着いて生活することが出来た一九二一年九月に完成された作品である。制作当時の作者の状況を反映して、この作品全体に明るさが満ちている。第七章も例外ではない。あらゆるものが静止しているような海辺の昼下り。避暑地のどのバンガロー(別荘)にも緑のブラインドがおりている。キザイア(Keria)と祖母フェアフィールド夫人(Mrs. Fairfield)とは共に昼寝中。幼女はベッドに、老女は膝にピンクの編物を乗せて揺り椅子に。夭逝した息子ウィリアムのことを考えていた夫人は、「おじさんのことを考えると悲しくなるの」とキザイアに問われて、自問する。悲しいだろうか。いや、過ぎ去った過去を振り返ってみても別段悲しくもならない、人生とはそういうものだ、と彼女は思う。キザイアが重ねて問う。

「ウィリアムおじさんはどうして死ななければならなかったの。年でもなかったのに。」

フェアフィールド夫人は編目を三つづつ数え始めた。「たまたまそうだったのよ。」

彼女はぼんやりとした声で言った。

「誰もが死ななければならぬの」とキザイアが尋ねた。

「誰でもよ。」

「私も。」キザイアの声はとても信じられないといわんばかりであった。

「いつかはね。」

「だけどおばあさん、」キザイアは左足をゆすぶり、両足をゆらつかせた。砂でジャリジャリする。「私がどうしてもいやだと言ったらどうなるの。」

老夫人は再び溜息をついて毛玉から毛糸を長く引っぱった。

「わたしたちはいいかいやだとかは言えないのよ。」彼女は悲しげに言った。

「おそかれ早かれわたしたち皆んなにおこることなのよ。」^⑩

キザイアは考える。死にたくない、死ぬとみんなから離れ

ていかなければならない。おばあさんからも。おばあさんが死んだら、自分をおいて行ってしまふ。キザイアはもう耐えられない。祖母の膝の上に乗る、首に手を捲きつけ、キスの雨を降らせたり、くすぐったりして、祖母に死なないと約束させようとする。老夫人も、キザイアの仕草に引き込まれて、孫を抱き寄せ、そうして、二人して笑い転げるのである。二人とも約束が何のであったかを忘れるほどに。床に落ちた編物を祖母がキザイアに拾わせるところで、「入江にて」第七章は終わっている。さて、「家ちがい」と比較してみよう。編物を中心に考えると、次の二点が重要となる。(一)ビン夫人は慈善のために編物をしているが、フェアフィールド夫人は別に何のためにでもない、(二)ビン夫人は編物をほどくが、フェアフィールド夫人は編み続ける、この二点である。(一)と(二)とは関連があるが、先ず(一)の問題点を整理しておこう。フェアフィールド夫人は、家族の一員として孫たちの世話をしたり、娘リンドの良き助言者となったりして活躍し、幸福な人間関係を保っている。彼女は現実に家族の者たちと強い繋がりを結びながら生活しているのである。他方ビン夫人はどうか。なるほど彼女はお手伝いのドリカスと共に生活している。しかしビン夫人は、同じ世代に属しているこのドリカスに対して

かなりの距離を感じている。例えば、ドリカスがストープの輪を落とす癖に我慢ならないと思ったり、このごろ何かにつけてドリカスの動作が緩慢になってきたと腹を立てたり、葬儀があることを知っていたのにわざと自分を一人にして買物に出かけたのだと疑ってみたり、さらに、自分の狼狽振りを見られてはならないと思ったりしているのである。このようにドリカスに対しては疎ましく感じているのであるが、これに反して、慈善の編物をとおして関連のある人たちには親しさを感じている。少なくとも彼女はそう思っているのである。このように、フェアフィールド夫人の生活は暖かで現実的で確実なものであるが、ビン夫人のそれは冷たく不安定である。さらに言えば、前者は強い連帯のなかにいるが、後者は希薄な結びのなかにいるのである。次に(二)について。この場合要点は二夫人の各々の死に対する態度にある。ビン夫人は死を恐れ逃げようとした。これに反して、フェアフィールド夫人は、死は誰にでも起ることであって、われわれ人間は死をいいだとかいやだとかは言えないのだ、と考えている。つまり彼女は、死は不可避であり、その不可避さの前では人間は無力である、と考えているのである。彼女には諦念がある。このように、「家ちがい」と「入江にて」第七章とを比較してみ

ると、同じく老いている二人の夫人の、生活と死に対する態度とに、これほどの差異があるのである。この違いはどこから来るのであろうか。

ここで再び作者マンスフィールドに眼を向けたい。彼女には弟が一人いた。彼レズリーが、一九一五年九月フランスの前線に赴くためにニュー・ジブランドからロンドンにやって来て、彼女の住いに一週間滞在した。「弟と姉は一緒に庭を歩きながら、ニュー・ジブランドで過した子供時代の日目を思い出していた。時間は二重の次元を帯びた、つまり、二人は同時に過去と現在との中で生きたのである。」^⑪彼女が深く愛していたこの弟が、手にした爆弾が破裂するという痛ましい事故で死ぬ。十月七日のことであった。遺体はフランス国境近くに埋葬された。「キャサリンは弟への悲しみに沈潜し、そのために私たちの間には障壁が生じた」^⑫とマリが書いている。彼女の沈痛の深さは、日記に次のように書かずにはおれなかったことから知り得る。

「十月二十九日、霧がとても深い夕暮。書いておきたい、私もまた死を恐れてはいないという事実を——死の思いを快よく迎える。不死を信じる、なぜなら彼はここにいないのだから、それに、私は彼と一緒にい

たいのだ。先ず、私たち二人のためにしなければなら
ないことがある、それが済んだら出来るだけ早く行き
ます。おまえがそこにいるということを知っている、
そして、おまえと一緒に住むのだ、そして、おまえの
ために書きます。^⑩

同じく十一月(日付未詳)。

「生命は私のも終るのだと長い間知ったつもりでいた。
だが、弟が死んで初めてこのことを本当にはっきりと
知った。そうなのだ。今、弟はフランスの小さな森の
真中に横たわっており、私は背をまっすぐに立てて歩
き、陽光と海からの風を感じているのだけれど、弟と
同じく私は死んでいるのだ。現在も未来も私には何の
意味もない。ひとびとにはもう何の「好奇心」もおこ
らない。どこへも行きたくない、私にとって価値ある
ことがあるとすれば、それは弟が生きていた時に起っ
たり在ったりした事を私に思い出させるものだ。……
たとえば、テーブルに向って腰をおろしている時、
手にしているインド製のペーパーナイフで死ぬとして、
どんな違いがあるだろうか。全然ありはしない。では
何故自殺しないのか。その理由は、私たち二人が共に
生きていた時のあのすばらしい時間を書く義務が私に

はあると思うからなのだ。それを書きたい。弟もそう
することを望んでいた。^⑪

深い悲嘆が吐き出した言葉、弟への弔辞とも言い得るこの
言葉は、まことに美しい。死は何ら恐ろしくない、不死を
信ずる、弟はこの世にはいないがあの世にはいる、こう彼
女は確信し、そこへ行きたい、かしこで弟と共に住みたい、
と一途に思い詰め、自殺をさえ思ったのであった。しかし
彼女はこの世に踏みとどまったのである。弟と共に過した
故郷ニュー・ジブラントでの子供時代を素材にして作品を
書くことを弟に対する義務である、とみなして。自らを死
者とし、他の事柄には一切関心を持たないで、ただひたす
らに弟への義務を遂行しようと決意するのである。ここに
彼女は生きることの意義を見出したのである。ところが、
死も辞せずと決意し、自分の生命にも必ず終りがあるのだ
と明確に知ったと言ったマンスフィールドが、病氣と孤独
感とに痛めつけられて、あの地震のような衝撃、死の恐怖
を味わったのである。「この二年間ずっと死の恐怖にと
り憑かれていた。その恐怖は次第次第に巨大なものとなっ
た^⑫」と、一九一九年十二月十五日日記に書いている。弟へ
の愛によって死は恐ろしくない、死んでもよいと思ったマ
ンスフィールドが、死は恐ろしい、死にたくないと言うの

である。ここに問題が二つ生じる。その一つは、死の恐怖の体験によって彼女が知ったことは何であったか、という問題である。彼女は弟の死に際して、自分も死ぬんだと本当にはっきりと知ったと言っていたが、実はまだそう思っていたのに過ぎないのであって、死の恐怖を体験することによって、このことを文字どおり本当に知ったのである。つまり死ぬ自分を如実に見出ししたのである。自己の在り方による死の恐怖を知ったのである。そしてこのことを知ることによって彼女は、死の恐怖から脱げることが出来たのである。先に引用した箇所を引き続いて、「十日前その恐怖はなくなった。もう気にしなくてもよい」^②と脱出を宣言している。もう一つの問題は、死の恐怖から脱け出た彼女はどのような心境に達したか、ということである。日記はさらに続く。「そのことで私はこの上もなく冷やかになっている。——生命はとどまるか消えるかだ、^③」と。死ぬ自分を知り、死の恐怖を払拭した彼女は、生命は有か無かだと思ひ定めるに至ったのである。ここには、自分を突き放して冷やかに見つめている彼女の姿がある。マンスフィールドの死に対する態度が大きく変化しているのを読み取ることが出来る。すなわち、弟の死に際して彼女は、死はかしこへ行くことであり、死者はかしこにいるのだと思ひ、不

死を信ずるとまで言い切ったのであった。ところが、死の恐怖の体験後、死ぬ自分を見出し、生命は有か無かであると、つまり人間は生きているか死ぬかであると、死を一つの事実として、捉えているのである。前者は弟への熱い情愛がとらせた態度であるのに対して、後者は恐怖が生んだ冷やかな姿勢である。ところでこの冷やかな姿勢は、一見したところフェアフィールド夫人の態度と似ているように思われるかもしれない。夫人は、死は誰にでも起ることであり、人間はおそろい早く死ね、と言っていたからである。しかし勿論違う。彼女は、人生とはそういうものだと語っていたように、死ぬという事実をただ知るだけでなく、事実をそういうものだと眺めるだけの余裕を持っていくのである。彼女は、有るがままの姿を有るがままに眺めているのである。彼女には、既述のように、死に対する諦念があるのである。このようにフェアフィールド夫人の死に対する態度と先の冷やかな姿勢とは次元の違いがあると言えよう。さらにまた、冷やかな姿勢からは次のような問いは出てこないであろう。すなわち、キザイアが尋ねていたように、人間は何故死ななければならないのか、という問いである。これは、事実を知るといふ段階から一歩前進したところから発せられる問である。一歩前進とは、

死の意味を問う、ということである。事実から意味は出てこない。そして、死の意味を問うということは、逆に、生きることの意味を問うことである。息子の死を、「たまたまそうなった(『It just happened.』)のだ、と受け取っていたフェアフィールド夫人の諦念もまた、こういう意味をもたらしはしない。マンズフィールドは弟の死に際して、弟のために死ねると言い、弟のために生きなければならぬと言った。この時彼女は、弟のために、愛のために、死にかつ生きなければならぬと思ったのである。冷厳な事実把握よりも、さらにはフェアフィールド夫人の諦念よりも、マンズフィールドのこの思いのほうがはるかに美しいと思われる。

マンズフィールドの死に対する態度を以上のように把握する時、「家ちがい」における編物の意味が明瞭となろう。編物は、ビン夫人の生と一体であった。さらに、彼女は編物とおして希薄ながらも他のひとびとの繋がりを維持していた。しかるにその編物をいずれ訪れる自己の死を知って、ほどこたであった。この時彼女の生は崩壊し、他との繋がりが断ち切られたのである。無自覚的生の無意味さが露呈し、孤独の本当の姿が顕現したのである。逆に

言えば、自分が死ぬ存在であることを如実に知り、そうして何故死ぬかを見極める時、ビン夫人が知ったような死の前にあっては無力で孤独な自己が、フェアフィールド夫人のように他との強い繋がりを持って生きることが出来るのである。このことが「家ちがい」の編物によって意味されていると考えられる。

註

- ① J. Middleton Murry (ed.), *The Letters of Katherine Mansfield* (New York: Howard Fertig, 1974), p. 296. (以下 *Letters* と略す。) 尚、Marvin Magalaner などの著 *The Fiction of Katherine Mansfield* (Southern Illinois: Southern Illinois University Press, 1971), p. 130. に於いて、一九一九年の作としてゐるが、根拠は示されていない。
- ② J. Middleton Murry (ed.), *Collected Stories of Katherine Mansfield* (London: Constable, 1976), pp. 675-678. (以下 *Collected Stories* と略す。) 尚、テキストとしてこの版を用いた。
- ③ *Letters* におけるマリの説明的部分に主として依った。また、『マンズフィールド——20世紀英米文学案内2』(研究社、一九七二年)所収の「年表」(伊吹知勢・山本順子編)を参考にした。
- ④ *Letters*, p. 288.
- ⑤ *Loco. cit.*

- ⑥ J. Middleton Murry (ed.), *Journal of Katherine Mansfield* (New York; Howard Fertig, 1974), p. 134. (以下 *Journal* と略す。)
- ⑦ ホーデンは、マンスフィールドは「イギリス小説における殆ど比を見ないほどに、自己の体験をその物語に織りこみつける」と言っている。 I. A. Gordon, *Katherine Mansfield* 斎藤美津訳 (研究社、昭和三十一年) 四頁。
- ⑧ *Collected Stories*, p. 675.
- ⑨ *Loco. cit.*
- ⑩ *Collected Stories*, p. 676.
- ⑪ *Ibid.*, p. 677.
- ⑫ *Ibid.*, p. 678.
- ⑬ 「家ちがい」を孤独性の観点から論究したものに、石塚虎雄『マンスフィールド論』(篠崎書林、昭和五二年) 三〇一—三〇二頁がある。ここでは、ビン夫人の孤独性は、「外面的には幸福な人間の、内面世界における孤独といった孤独性」であり、しかも、「その人にとって全く外在的な、瞬間的な偶然性が要因になっている孤独性」であるとされている。
- ⑭ しかし、後に述べるように、ビン夫人の孤独は死の前に立った人間の孤独と言って可いであろう。
- ⑮ *Collected Stories*, pp. 205-245.
- ⑯ Ruth Elvish Mantz, *The Critical Bibliography of Katherine Mansfield* (New York; Burt Franklin, 1968), p. 42.
- ⑰ *Collected Stories*, p. 226.
- ⑱ Sylvia Berkman, *Katherine Mansfield: A Critical Study* (New Haven; Yale University, 1959), p. 67.
- ⑲ John Middleton Murry (ed.) *Katherine Mansfield's Letters to John Middleton Murry* (London; Constable, 1958), p. 43.
- ⑳ *Journal* p. 37.
- ㉑ *Ibid.*, p. 38.
- ㉒ *Ibid.*, p. 134.
- ㉓ *Loco. cit.*
- ㉔ *Loco. cit.*